幼馴染　記念SS

愁ちゃんのひみつ

「お疲れー、海瀬、今日はいつもの店……で……」

立川昇は、自他共に認める面倒見のいい男だ。いや、勿論自ら『俺、面倒見最高にいいんだよね～』と思っているわけではない。自称するなら、単なるお節介だ。弟妹が複数いる長男というのは、意図せずとも自らの価値観に他人を巻き込みがちだとわかっているから、それなり自制しているものの、なんとか周囲には、匙加減が悪くないと思ってもらえているようで、アノヒトメンドウクサイ評価ではなく、面倒見がいい、で収まることができている、らしい。

そんな昇の、最近の構い対象は、二つ年下の後輩だ。先日、この地方支社に赴任してきた海瀬愁という男は、その仕事の要領の良さが一体どこから生まれるのか疑問になる程、本人はどこかヌけている。

空気も読める。物腰も柔らかいし、他人への気遣いも良い。本人は口下手でコミュ障気味だと思っているらしいが、実際話してみれば大したこともない。むしろ、変に人付き合いに慣れ切っている男より、女性陣の評判は悪くないほどだ。それなのに、自分自身にどうも無頓着でいけない。そういうところを見つけると手を出さずにいられないのが、長男の性というやつだ。

というわけで、飯を食うのも面倒臭がる後輩を、ノー残業デーには連れ出して、それなり栄養を取らせるようにしている。愁の方も、もともとは人と一緒に食べる習慣がある人間なのだろう。誘うと嫌な顔をしないし、よく食べる。

あれも食えこれも食え、をしても、素直に食べるのは弟妹よりよっぽど手がかからない。

本日、水曜、ノー残業デー。ということで、山盛りの野菜やら肉やらを食わせてくれるいつもの定食屋に誘おうとしたわけだが。

「……なあ、海瀬のアレ、どうしたの」

「わからないのよ。昨日まで有給とってて出てきたらアレで……仕事はちゃんと、やってはくれるんだけど……」

彼と同じ部署の女性が、困惑顔で声を潜めて教えてくれる。

他の社員にもちらちらとみられている愁の有様と言えば、机で微動だにしない、いわゆるゲンドウポーズだ。いや、少し違うか。肘をつき、組んだ手の甲の上には顔が伏せられており、背中には梅雨時期のような湿気をじっとりと背負っている。傍に寄るだけで黴が生えそうだ。

終業時間はとっくに過ぎている。皆、席を立って荷物を持ってそれぞれの帰路についており、先ほど愁の様子を教えてくれた女性社員も、ちらちらと身動きしない愁を気にしつつ、立川に任せた、の顔を見せて帰って行った。

「……おい、海瀬。どうしたよ」

おそるおそる声をかけると、立川の声と気づいたのか、ぴくりと肩が震える反応があった。そのまま、ゆっくりと顔を起こした愁の顔は、苦手なゾンビ映画を無理に三周見終えた直後の様に、げっそりとしていた。

「……先輩……」

「……すごい顔してるぞ、お前。どうしたよ。一昨日から地元帰って、久しぶりの幼馴染にサプライーズ！　するんじゃなかったのかよ」

この無頼着男が生き残って来れたのは、どうやら地元の幼馴染のおかげらしい、と立川は聞いていた。それが女子で、しかも滅茶苦茶に可愛いと大絶賛する海瀬に、付き合ってんの？　と聞くのは自然な流れだろう。

だが、愁の返事は曖昧で、誰より可愛くて誰より大事な女の子だが、付き合おうとか、好きだとか、明確に伝えたことがないという。心配しなくても、彼女はずっと俺といてくれるはずです、とか、珍しく照れたような良い笑顔で言う愁に、「そうやって曖昧にしてると、後悔するぞ」とはっぱをかけたのが先週の話。

己の体験談からそう伝えたわけだが、何となく焦る気持ちになったらしい愁が一度もまだ帰っていない地元に戻り、彼女に会ってくる、と旅立って――そして今に至る。

「……先輩の言った通りでした……」

「……なんだ、彼氏でも出来てたか」

気づけばこのフロアにはもう愁と昇しかいない。周りを気にせず、ずばりと聞くと、うっ、と詰まって再び顔を伏せる。あーあ、やっぱりか。

「……幼馴染ってのはなあ、……一番難しいんだっつの。距離が近いから、意識してもらいづらいし、周囲のしがらみも多いから、一歩踏み込むのもあれこれ面倒くさくなる。好きになったとしても、しかも相手がそれをOKしてくれたとしても、妥協なんじゃないかと思えてくる。そういうのを全部乗り越えて、それでも、って手を伸ばす頃には、誰かにかっさらわれてたりする」

「うう……」

唸り声をあげる後輩の恋路はなかなか厳しいらしい。というか、先週そんな

話題をしたときには、あるいはこの男、その幼馴染ちゃんに恋をしている自覚すらなかったんじゃないだろうか。無頓着、極まれりだ。

「……まあ、とりあえず飲みにでも行くか」

ぽん、と肩をたたくと、愁が再び幽鬼のような顔を上げる。溜息を深々吐いてから昇をじっととした視線をむけてきた。前髪が分厚いせいでいつもは目立たない愁の顔立ちは、実はかなり整っている。昇でもわかる、これはイケメンというやつだ。それが、何かこっちをじっと見るから怯んだ。

「な、なんだよ」

「先輩、あの子なんですけど」

「あの子って、……幼馴染ちゃんの事か」

「め……ッちゃくちゃ」

「え?」

「可愛くなってたんですよ」

「……はあ」

間の抜けた声がでても仕方がないと思って欲しい。今、そういう話だっけ?と思ってもしょうがないと思って欲しい。というか、地元から離れて、まだ二か月ちょっとじゃなかったか。子供じゃあるまいし、そんなにすぐ変わるか?

「実家に帰ってから声かけようと思ったんですけど、その前に地元駅で見かけて、なんか花柄のワンピース着てて、小花柄っていうんですかあれ。あれの、なんか薄い水色のやつだったんですけど、それ確か俺が昔一緒に買い物に行った時にピンクと悩んで、水色の方が似合うって言ったから買ったやつで、それまだ着てるんだと思ったら胸がいっぱいになったんですけど、膝下位の丈で、

ストッキング履いてるふくらはぎがすらっと出てて、あ、先輩、想像しないでください。減るので。そのふくらはぎから足首のきゅっとなるところまでのラインが彼女めちゃくちゃ綺麗な足してるんですけど、想像しないでください。減るから。その下に、パンプス履いてたんですけど、そんなにヒールがないやつで、それも普無理して高いヒール履いて転びそうになったのを俺が助けたことがあって、それからそんなに高いの履かなくなったからで、多分下ろしたての靴なのか、ちょっと足元気にしてるのも滅茶苦茶可愛くて、それから髪の毛が二ミリぐらい長くなってたんですけど、その位の長さでもすごい似合ってて、すごい可愛いかったです。切らないで欲しい。でも切っても可愛いと思う。で、ポシェットっていうんですか、斜めにかけるバッグ持ってたんですけど、その紐が胸元を斜めに通ってるから、胸のサイズがくっきり出そうになってて、すごいハラハラして思わず声かけそうになって我慢しました。待ち合わせしてるのか、時々時計見てたんですけど、敢えてスマホじゃなくて時計を見る、あの手首を持ち上げる仕草とかも最高にどきっとするやつで、そう、彼女、足首も細いんですけど手首も細くて、なんか見てるだけでムラムラするんです。あ、想像しないでください。で、そのうち男が来たんですけど、どうやら彼氏みたいなんですけど、その男と会うのに俺と選んだワンピース着てるっていうのがまた感無量で」

「待て待て待て待て待て！」

この男がこれほど喋る姿を誰が想像しただろうか。この放っておけない後輩は、むしろ無口寄りだと思っていた数秒前までの自分を責めたい。放っておいていいやつだ。なんなら放り投げたい。なんだその、二ミリ髪が伸びたって、

わかるのかそんなの常人に。しかも、途中で言葉を止めさせた俺に、妙に不服そうな顔を向けるのを止めていただきたい。あと、想像しないというかお前に驚きすぎてその余地すらなかったから、心配しないでいただきたい。

「か、彼氏ができてて落ち込んでた、とかそういう話じゃねえのか？」

むしろそうであってほしかった。いくら俺が長男でも手が余る、こんなの、と涙目になりかけた昇の言葉に、愁は、げっそりとした顔の中に、女子が見惚れそうな良い笑顔を浮かべた。

「あの子は、絶対俺だけのものにしますから。……とりあえず、こっちに赴任している間に、外見を整えておきたいと思うんですけど、先輩、協力してもらえますか？」

「いや、そりゃ……いい……けど、……お前、大分、キャラ違ってねえ？」

「あの子が、俺の面倒をみなきゃいられないようにしてたんで、色々適当にしていたんですけど。どうも、そうは言ってられないようなので」

「……はあ……」

今となればもう、げっそりしているのは昇の方だった。目の前の男は、想い人に彼氏がいたことより、思った以上に彼女が可愛すぎたことに、思い悩んでいたようにしか思えない。そんな人間いる？　どこにいったんだろう、俺の可愛い後輩。

「よく、言うじゃないですか。恋は、人を変えるって」

良い笑顔を浮かべてそんなことを言う愁が、本当に全身イケメンになって、意気揚々と地元に帰って行くのを昇が見送るのは、その二年八か月後の話。

終